

## 私にとってのサリヴァン・ パーソニフィケーション

川畑直人<sup>\*,\*\*</sup>

私は、1997年から2001年までの4年間、米国ニューヨークにあるウィリアム・アランソン・ホワイト研究所において、精神分析家になるための訓練を受けた。サリヴァンは同研究所の創設者の1人で、研究所を支える理論的支柱を提供した人として、研究所にとってシンボリック的存在である。そのサリヴァンに対する思いを、わが国のサリヴァンに造詣の深い方々に並んで、発表できることに感謝している。

ただ、創設の時代から相当の年数が経つなかで、不慣れな言語に悩まされながら七転八倒した私の体験は、サリヴァンを直に知るといふ世界からはほど遠い。また、サリヴァンが直接研究所に関わった期間は短く、研究所の所長になったクララ・トンプソンや、カンディデイトのスーパーヴィジョンを長くしていたエリック・フロムに比べると、彼の実像を伝えるようなエピソードを耳にすることはめったにない。従って、私にとってのサリヴァンは、彼の理論に触れる中で、私が勝手に描き出した像である。それはなかば私の考えであり、私の願望であり、私の理想が投影されたものということになる。

そこで、表題にパーソニフィケーション (personification) という言葉を用いてみた。これはサリヴァンの用語で、コンパクトに定義すると「人格として把握される他者や自己のイメー

ジ」ということになろう。自己像、他者像、自己表象、他者表象という方が、心理学になじみのある人には通りがいい。サリヴァンの解説書で知られるチャップマンなどは、この用語を「概念」と完全に言い換えてしまった<sup>1)</sup>。しかし、この言葉のニュアンスは、一連の心理学用語からは抜け落ちるある側面を照らし出している。つまり、人物像というのは、その人物の人格特徴を抽出し、それを構成し、人格として見立てる表象作用がなければ成立しないという事実である。中井久夫氏の「擬人存在」という訳は、この側面を前面に押し出した訳と言えよう。そこには歪み、合成、見落としなどが入り込む。私の場合、むしろ想像といった方がいいのかもしれないが、それでもそれなりにサリヴァンのイメージはあるので、この用語を使ってみようと思った。

パーソニフィケーションに限らず、サリヴァンは自分流の用語を使いすぎるとよく批判を受ける。彼の文章は、研究所においても読みにくいことで有名で、授業で彼の文献が課されると、同級生達が難解だとぼやいていたのを思い出す。「サリヴァンは難しいから、研究所にいる間はほとんど読まず、卒業してから時間をかけて読む人が多いのよ」と話してくれたのは、私の個人分析家のマーシャ・ローゼンであった。しかし、日本人にとっては少し事情が異なる。中井久夫氏の訳があるからである。日本語に自動変換したような訳本が多い中、氏の訳は、原著者のアイデアの真髄を理解し、その理解を伝えるための工夫に満ちている。

\*京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科  
〔〒611-0041 京都市宇治市黒島町千足80番地〕

\*\* KIPP 桃山心理オフィス

そのおかげで、誰よりも英語が分からぬ私が、最もサリヴァンのアイデアに近づけるといふ恩恵にあずかることができた。同級生達から、「どうしてお前はサリヴァンがそんなに分かるんだ」と聞かれ、この訳本の存在を紹介できたときは、日本人として誇らしくさえ思ったことを覚えている。

訳本に恵まれたとはいえ、訓練中から、サリヴァンのことをよく分かっていたという実感はない。分析家が示唆したとおり、サリヴァンの思想を噛み砕く作業は、訓練を終えて、日本に帰国してからのこの10年に、何かの合間に、あるいは必要に迫られて、著作のここそこにあたりながら、徐々にしてきたことである。未だに十分読み尽くしたとは言えないが、その存在はますます私の中で重さを増している。

\*

早世して名を残した人物の常であるが、サリヴァンの最大の魅力は、思想が展開する可能性の広さではないかと思う。体系化され、完結した思想にはない、着想段階の勢いがあるように思う。もしかするとサリヴァンの中では、十分に完結していたのかもしれない。しかし、その理解になかなか追いつけない我々にとって、解りかける瞬間の戸惑いと驚きがそう感じさせるのだろう。

実際彼の思想は、とても革新的である。自我、自己、同一性といった主体の中心となる意識は、移ろい、変幻するものとしてとらえられる。個体として存立する人間という考え方に対する、徹底した懐疑がある。パーソナリティは個人の中にあるものではなく、他者との関わりそのものである。関係を結ぶ相手の数だけ人格の数があるといえるほど、人格は多面的である。常識的な感覚を裏返していく彼の議論は、システム論、社会構築主義、ナラティヴといった議論に慣れた我々にとっても、まだまだその新鮮さを保っている。

「対人の場の統合」という表現ひとつをとってみてもそうである。空腹になり何かを食すという営みは、人間個人の中で生じる欲求処理の話ではなく、乳を与えるものと乳を吸う者を関係の中で結びつけ、二者による統合状態を作り出すことな

のだと捉える。一見すると弱肉強食ととれる食物連鎖が、生態系全体に組み込まれた共生のシステムであるという認識転換に相応する。この視点の転換は、治療状況を患者との関係に巻き込まれながら観察する場であるとした治療観につながり、ひいては精神分析的な事態を転移・逆転移がもつれ合うエナクトメント状況と捉える現在の二者心理学的観点へと繋がっていく。対人関係論は難しいということをよく言われるが、相手を見つめる視点、自分を見つめる視点、加えて自分と相手の関係を外から見つめる視点のあいだを、行き来しなければならぬのだから、確かに人間の認識能力に対する挑戦という面がある。

サリヴァン思想の革新的影響力は、精神分析という枠に収まりきらず、広く心理療法全体の流れを左右していく。メスメリズムを脱却した現代の心理療法の流れを作ったのがフロイトだとすると、サリヴァンはその流れを多方面に分岐させる役割を果たしたといえる。サリヴァンに影響を受けたベイトソンを介してシステム理論が発展し、ホワイト研究所の訓練生であったミニューチンが構造的家族療法を生み出し、サリヴァン派の分析に親和するなかでエリスの理性情動療法やベックの認知療法が生まれるなど、直接・間接の影響はいたるところでみられる。また、ヒューマニスティックなアプローチという点では、ロジャースの観点と相通じるところもあるし、もっと言えば、サリヴァンが有する経験論的な志向性は行動論的な考え方も相性がいい。

心理療法諸派の考えとの交信が可能なその器の広さを考えると、フロイトの特殊理論に対する一般理論としての位置づけを持ちうるように思う。フロイトの精神分析は、神経症圏の病理、エディプス葛藤への注目、自由連想、寝椅子の使用、週4回から5回の頻度など、対象と方法を限定することで、理論的整合性、治療的有効性を維持しようとした。いつしかその形式が、心理療法における特別な地位を主張するようになる一方、サリヴァンの理論は、そうした限定を取り去り、治療のモダリティにしても、治療の対象となる病理にし

でも、より広い範囲を掌中に収める可能性を持っていた。特にその理論の適合範囲の広さについては、ミッチェルの関係論パラダイムやワクトルの統合理論が、いずれもサリヴァンの対人関係論に依拠しつつ発展したという経緯そのものが、よく語っているように思う。

\*

ここまでは、理論家としてのサリヴァンについてであった。次に、治療者としてのサリヴァンについて述べてみたい。はじめに述べたように、ホワイト研究所の中で、サリヴァンのエピソードに触れる機会はそう多くない。しかし、彼の臨床姿勢を受け継ぐ流れははっきりと存在しており、それはまた同じ研究所内でも別の流れと対比される。私がよく耳にしたのは、治療者の真実性(authenticity)を重視するフロムの系譜と、患者の不安に対して細心の注意を払うサリヴァンの系譜である。フロムについていうと、歯に衣着せぬ率直さで、正面から直面化を迫るといった逸話が多い。ときにそれは高圧的な印象を与えるが、嘘偽りない治療者の姿勢を重視する対人関係学派のひとつの特徴の源となっている。それに対して、サリヴァンは精神病患者に対する繊細な共感性を持っていた人として語られることが多く、患者の不安のレベルを感知することがいかに重要であるかを示すよき見本とされている。「不安勾配」という彼の概念は、このことと結びつけて説明される。患者が心理療法の中で最も効率よく学習するためには、不安は高すぎても低すぎてもいけないというわけである。

興味深いのは、同じ理屈であっても、聞く側の志向性で、ずいぶん聞こえ方が違ってくるといった点である。私の場合、直面化を好まない日本的な風習に馴染んでいた訓練初期には、明らかに「不安は高すぎてもいけない」という側に注意を払っていたのが、訓練が進んで直面化の文化に親和するにつれ、「不安は低すぎてもいけない」という側に注意を払うようになった。不安を喚起しすぎるとみれば話題を転換し、患者を追い詰めないやさしいサリヴァン先生よりも、皮肉混じりの辛辣

な言い回しで、患者の注意を喚起するサリヴァン先生に魅力を感じるようになったのである。日本に帰ってから始めた精神分析の研究所で、一時期訓練生達から「いじわる」と称されたのは、この辛辣なサリヴァン先生に同一化しすぎたからではないかという気がしている。

辛辣さということに少し通じるが、サリヴァン派の臨床では質問するということが重視される。いうまでもなく、これは詳細な質問(detailed inquiry)という、対人関係学派の看板とも言える技法に由来する。この詳細な質問も、彼の著作の中では、文脈によっていろいろな色合いを見せるので、はっきりと定義することが難しいのだが、私としては、患者の体験の詳細を汲み上げることが、その最も中心にある意味だと考えている。しかし、文脈によっては、もう少し単純に、「詮索する前に尋ねよ」という臨床姿勢として語られることも多い。私の最初のスーパーヴァイザーであったアイラ・モーゼスは、非常に割り切りのいい人で、ごちゃごちゃと患者のことについて推論を述べると、なぜ直接尋ねないのかとあっさり話を打ち切られる。はじめはこの冷静な合理主義者について行けない気がしていたが、ひとたび尋ねることによって得られる収穫の大きさを体感すると、大事なことを尋ねない臨床記録は物足りなくて聞く気がしなくなった。この点も、日本に帰ってから大きな文化ギャップを感じるころだった。

対人関係学派の看板技法が詳細な質問だと書いたが、フロイト派の自由連想に対比されるほど、それが対人関係精神分析において重要な位置づけを持つようになるとは、サリヴァン自身も予想していなかったであろう。サリヴァン自身は、この技法によって、患者が転移関係外でどのような対人関係を繰り広げているのかを捉えようとしていた。その姿勢は、患者が何を思うかではなく、患者が何をするのかに、治療者の関心を引きつけることになった。それが精神分析という器に持ち込まれると、転移関係において患者が語るのではなく、関係の中で患者が行うことへの関心に導かれる。レ

ヴェンソンが再三強調する、「ここで何が起きているのか(What is going on around here?)」という問いである。今やどの学派でもあたりまえのようにエナクトメントについて語るようになったが、サリヴァン派にとってその議論はかなり古くから馴染んできたものである。それはこの技法がもたらしたひとつの遺産ではないかと思う。

\*

さて、サリヴァンの臨床姿勢をこのように書いてくると、彼はいかにも辛辣な現実主義者、合理主義者であるという感じがしてくると思う。しかし、彼の理論には、もうひとつ別に、ロマンティックで理想主義的な側面がある。いうまでもなく前青春期のチャムの記述を頂点とする親密性の発達論であり、それに基づく治療観である。

児童期の終わり、性器結合を志向する情欲が動機づけの力を持ち始める直前、同性の親しい友人との間で結ぶ水入らずの関係は、「愛の全面開花にはなはだ近いもの」の始まりをもたらしサリヴァンは説く。それは相手が自分と同じように大切な人間となること、相手の幸せが自分の幸せと感じられるようになること、そしてその幸せが私でもあなたでもなく「私たち (we)」のものであると感じられるような精神性に向かう一歩を意味している。

このチャム関係は、乳児期のやさしさ欲求に始まる親密性の発達の到達点であるだけでなく、幼少期の家族経験に由来する欠乏、傷つき、歪みを修正する治療力をもつとサリヴァンは主張する。パラタクシクな歪みの修正は、心理療法の中核的な目標である。その意味では、サリヴァンにとって、チャム関係は最大の心理療法的関係であり、逆に心理療法が心理療法として機能するためには、チャム関係的特性がそこに実現されなければならないとも言える。

この5、6年、私は、大学院生達と発達障害をもつ就学児童を対象としたグループセラピーを実施してきた。その中で学んだ最大のことは、子ども達を癒し、育む最大の存在は、子ども達だということである。親子関係モデルで心理療法場

面を捉えることに慣れすぎてしまうと、このような明白な発達の現実すら目に入らなくなってしまう。同じような錯覚は、クライアント達も共有している。最近、ある大人のクライアントが、社会は殺伐とした戦いの場で、家庭はそれを癒してくれる場であると述べた。なかば自動的にそれに頷きかけたとき、私ははたとサリヴァンのことを思った。社会は新たな親密性を実現する場所ではないのか。

サリヴァンが、統合失調症に保存的 (conservative) な側面があると述べたのも、この親密性の問題と深く関連している。人との親密な関係など必要ないという生き方が維持できなくなったとき、統合失調症は発症する。それは、親密な関係を求める強い欲求を回復 (保存) することであり、それゆえ人間的な過程なのだと言ったサリヴァンは言う。数年前になるが、ある精神科デイケアの集会で、統合失調症のメンバーが別のメンバーを次のように論しているのを聞いて驚いたことがある。「君はまだ発病して間がないから慣れていないのだと思う。一人っきりが寂しいと感じることに」。

\*

同僚や後輩の精神科医を辛辣に批評する孤高の師、アルコールの匂いを漂わせ、金銭管理ができない生活破綻者、性的指向の問題もあって愛に恵まれなかった人、しかし、精神病者に対しては類い希なる共感性を持つ臨床家、そして人類の平和に身を投げ出す理想主義者と、さまざまな側面が伝記的に言い伝えられるサリヴァンである。私にとってのサリヴァン・パーソニフィケーションは、思想に触れるなかで造り上げるものでしかないが、その多面性と革新性もたらす刺激は尽きそうにない。

## 文 献

- 1) Chapman, A. & Chapman, M. : Harry Stack Sullivan's Concepts of Personality Development and Psychiatric Illness. Brunner/Mazel, INC., New York, 1980. (山中康裕監修, 武野俊也, 皆藤章訳: サリヴァン入門. 岩崎学術出版社, 東京, 1995.)